



並木中等story

令和4年10月13日号

千手観音

今日も昨日に続き、は市川白弦氏の『沢庵』（講談社）に書かれていたことです。皆さんは“千手観音”という名前は聞いたことはありますか。手が何本もある観音様です。（著作権の関係で掲載できません。お許してください。）私は、「たくさん手があっても、ほとんどは役にたたないのではないか。」とお坊さんに話したことがありました。市川氏はその答えを次のように答えています。

作権の関係で掲載できません。お許してください。）私は、「たくさん手があっても、ほとんどは役にたたないのではないか。」とお坊さんに話したことがありました。市川氏はその答えを次のように答えています。

「一つの所に心を止めないからこそ、千本の手が用に立つのです。不動智さえ開けたならば、手が千本あっても皆、用に立つことを人々に示そうとして作られたのが千手観音です。例えば、

一本の木に向かって、その内の赤い葉一つをだけを見ておれば、残りの葉は目に入らぬものです。一つの葉に目をとらわれず、一本の木に無心に向かうなら、数多くの葉も残らず目に見えるものです。」

ことわざに、“木を見て森を見ず”というの也有りますね。細部にこだわる必要がある時もあります。ただ、そればかりで無く、一つにとらわれない見方も必要なのです。

《祝 おくのほそ道草加松原賞受賞！》

第2回おくのほそ道草加松原国際俳句大会において 5年次の鈴木さんの作品“色変へぬ 松や点字の 手紙書く”がおくのほそ道草加松原賞に輝きました。おめでとうございます。